視察報告書を提出：個人・会派行政視察（2016.04.15-16）

麻生飯塚病院　講演：「児童虐待に関する飯塚病院の取り組み」

講師：飯塚病院小児科診療部長　大矢崇志先生　４月１５日

記：町田市議会議員　吉田つとむ　保守連合

飯塚病院＝ウィキペディア記載内容でまとめる

飯塚病院は、福岡県飯塚市にある医療機関。株式会社麻生が経営する病院である。飯塚市・嘉麻市・嘉穂郡桂川町で構成される飯塚保健医療圏の災害拠点病院であり、地域医療支援病院の承認や多数の指定機能を有する。

許可病床数 1116 床　一般病床：978 床　精神病床：138 床

職員数は、約 2000 名

医療の理念に、まごころ医療、まごころサービスを掲げ、「医療の質方針」は、「日本一のまごころ病院」をうたっています。

今回の視察テーマについて

今回のテーマ＝「児童虐待に関する飯塚病院の取り組み」（講師：飯塚病院小児科診療部長大矢崇志先生）でした。

病院としては特殊な取り組みですが、地域の基幹病院となっていること、あるいは「筑

豊」と言う炭鉱地域の閉山を経て、多くの貧困が発生した地域です。

パワーポイントを使っての説明でしたが、冒頭は「土門拳」の筑豊のこどもたち　で始まりました。筑豊の子どもと言えば、給食が無い時代のことで、隣で持参のお弁当を食べている児童の横では、弁当が持ってこれない児童が机の上に教科書を開いて読書をしている姿の写真が印象的です。貧しさと豊かさ（あるいは一般）の生活が隣り合っていることが良くわかります。

この社会背景は今も続いているようで、貧困家庭が多いのがこの地域の特徴で、この飯塚市よりもっと著しい自治体もあるとのことでした。長く福岡県に居住し、そのエリアを回る仕事をしていた、かつまた社会的な事象に関心を持っていた私には、頭の中にその様子がある程度はうかがえるものでした。

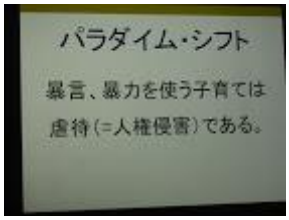
説明では、その貧困と関連性が高いとするで、家庭での暴力、あるいは子どもへの暴力が見逃せない事例で起きていることが説明されました。そのことをどのように防止するのか、減少させるか、政治が考えないといけない課題となっている。それは、児童虐待が減少せずに、著しい増加傾向を見せていることが一番に挙げられている。

そのほかにも、大人が被害にあった時にはすぐに事件として扱われるが、家庭の親子では事件として直ぐには認められない傾向を新聞記事の見出しで語られました。それは、いわゆる「しつけ」と暴力の関係が不透明であることで語られました。

総じて、警察のかかわり、行政のかかわり（特に、児童相談所）がどこまで関与するか、事態は起きてからしか収束していかないし、ことが明るみに出た時点では取り返しがつかないことがあるのが、この児童虐待です。

病院（医師）は対象者を出来るだけ自身が見ることで、判断できる環境を設定しようとしていますが、どこまで踏み込めるか、実情はなかなか困難が伴うように聞こえました。

その点を補うために、さまざまの機関のネットワークを使い、一つの事例に、手前の状況に、児童虐待が無いかを探る体制の基幹になっているのが、この麻生飯塚病院小児科診療部の務めと感じました。



飯塚病院では、**パラダイム・シフト**（＝その時代や分野において当然のことと考えられていた認識や思想、社会全体の価値観などが革命的にもしくは劇的に変化すること）の考え方で、「暴言・暴力を使う子育ては虐待（＝人権侵害）である」ととらえています。

診療した児童に対して、常に、その体のあらゆる部分を観察すように対応されているとのことでした。それでも、児童虐待を行っている可能性がある親から児童を引き離して、十分な診療を満たすことは容易ではないことを感じました。

児童虐待が頻繁かつ、多数ある時代、われわれ、地方議会にあるものがどのようにかかわれるか、議員はどのようなスタンスを取るべきか、もっともっと、詳しく話を聞き、あるいは地域の情報を収集して、検討していかねばならないと思いました。